

教員紹介

今回は、人間文化創成科学研究科自然・応用科学系准教授の郡宏先生をご紹介します。郡先生は、大学院では理学専攻情報科学コース、また学部では理学部情報科学科にご所属です。



Kori Hiroshi
郡 宏

好きなことを大切に そして大事に育ててほしい

何人かがパターン形成に興味を持っていたので、この機会に取り組んでいこうと思っています。

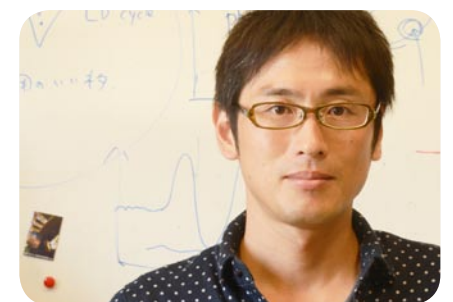
Q.お茶大の印象とお茶大生へ向けてのメッセージをお願いします

当初、女子大というものは、まったく想像がつかなかったのですが、着任して感じたことは、「学生にとって女子大は良い場所だな」ということでした。共学の場合、理系の女子は人数が少ないため孤立してしまうことがあったりしますが、お茶大では友達をたくさん見つけることができ、みなさんとても元気に活動されている感じがしています。

学生へのメッセージですが、まず留学を強く奨めます。留学できるチャンスは人生でそうはありません。留学は絶対に人生の宝になります。交換留学の制度などをいかして、是非行ってもらいたいです。

それともう一つ。自分はかなり楽天的な性格なのですが、それでも新しい町に移り住むたびに新たな交友関係を作らなければならず、そして人間関係に苦しみ、また、自分の能力の足りなさや将来への不安に悩まされました。そのたびに自分を助けてくれたのが、自分の好きなことでした。新しい町ではサッカーを通して直にいい友達ができました。ベルリンの冬は真っ暗で精神的にとってもつらいのですが、でも毎週末のクラシック音楽のコンサートが希望の灯火でした。いい小説を読めば元気も出ましたし、それを肴に友達と飲んで語り合い、そうやって好きなことにたくさん助けられてきました。みなさんにも好きなことがあると思います。それらを大切に、人生のよき伴侶として大事に育ててほしいです。

文責：小林一郎
(大学院人間文化創成科学研究科
自然・応用科学系教授)



やっている姿がとても印象的でした。自分の過ごしてきたところとの違いは、教員などの指導者の「励まし」だと思いました。それを見て、自分も学生をしっかり励ませるような教員になって、日本の大学をこれくらい元気にしたいなと思いました。

Q.ご専門内容について、また、現在のご研究内容についてご紹介ください

私たちの身の回りで繰り広げられる複雑なダイナミクスを、数学的に記述し、予測、理解、制御する研究を行っています。研究対象として興味を持っているものは、「時間変化するもの」、「うつろい行くもの」などです。その中でも、とくに生命現象に興味を持っています。現在、進めている研究のほとんどが「生物リズム」に関するものです。取り組んでいる研究課題のひとつは、生物リズムがどうしてそんなに正確なのか、ということです。体内時計にしても心拍にしてもリズムがすごく正確です。そのような正確なものが生物のようなゆらぎが多い世界の内でもどうやって作られるのか、とても興味をもっています。それから、細胞分化に関する課題にも取り組んでいます。遺伝子発現には、実はリズムが大きく関わっていて、そのリズムを理解すると細胞分化を上手く制御できるのではないかとということが考えられます。この研究は、国の戦略的創造研究推進事業(CREST)の課題として進められる研究で、共同研究者として京都大学のグループと一緒に課題に取り組んでいます。また、自分の研究室の学生達とやろうとしているものとして、生き物の模様などのパターン形成に関する課題があります。この課題では、簡単なルールから複雑な模様ができるメカニズムを解明しようとしています。リズムが時間方向の秩序形成なのに対して、パターンは空間方向の秩序形成になり、数学的には両者はかなり近いものとなります。どちらも興味があります。とくに、自分は小さい頃から、うさぎの模様とか岩石とかの模様(結晶形成など)がどのようにできるのかについて興味を持っていました。ちょうど学生のうち

Q.ご出身、ご経歴などについて教えてください

千葉県出身です。落花生だけでなくトマトやキュウリもとてもおいしい所です。東北大学を卒業後、京都大学大学院に進学し博士号を取得しました。その後は、ドイツ(ベルリン)のマックスプランク研究所研究員、北海道大学理学研究科COE研究員を経て、2008年3月より本学、お茶大アカデミック・プロダクション特任助教になり、2012年4月より本学大学院人間文化創成科学研究科自然・応用科学系准教授に着任しました。また、趣味は、スポーツ、音楽鑑賞、文学鑑賞、散歩、お酒などです。

Q.先生は様々な分野や場所でご研究をされてきていると伺っています。どのようなことをご経験されたか教えてください

分野として経験したということよりも、様々な国や地域で過ごしたことで、いろんな経験をしてきたと思います。学部の時を過ごした東北大学は、みんな近くに住むことになる地方大学の特徴でしょうか、毎日友達たちと夜を明かす家族的なつきあいを楽しみました。大学院を過ごした京都大学は、学生同士で自主ゼミをたくさん行い、自分たちの力で研究を進める風土がありました。でも、教員たちはお茶大のように学生に気を配ってはくれず、成果を評価してくれる人もおらず、そうすると学生たちが元気を保つのは難しかったように思います。自分自身、そういった研究活動に希望が見えず、研究者ではない道に進もうかと考えたことが何度もありました。ですが、ドイツに行ったら、学生たちがみんなすごく元気に研究をしていました。ドイツは日本より大学の職が限られているなどアカデミックに対する状況は良く無いはずなのに、そんな中でもみんな前向きにしっかり